

総 括 セ ッ シ ョ ン

中国をめぐる開発と和諧社会 — 課題と展望 —



司 会
高橋五郎（愛知大学）



2008年12月7日（日）

○司会 では、総括セッションの前に、つなぎとして簡単に私の感想を一言述べたいと思います。昨日は、皆さん、ご存じのように、最初は慌ただしい経済セッションから始まりました。それから、落ち着いた環境セッションがありました。最後に、ラジカルな政治セッションで終わりました。非常に長い一日でしたが、それが昨今の中国の姿なのではないかと密かに思っていました。

それが今日は、午前中に情熱と反省の文化セッションがありました。毎年、このようにシンポジウムをやっておりますが、来年のICCS総会に向けて、実は1つの期待をしていることがあります。期待とは、慌ただしい経済セッションではなく、慌ただしい政治セッションになってほしいと思っています。

これまで政治改革は、声高々に叫ばれていますが、遅々として動きません。ですから、もう経済はいいですので、慌ただしい政治セッションになれば、もっといろいろな具体的な課題が提起されるのではないかと期待しています。

それから、慌ただしい経済セッションではなく、落ち着いた経済セッションになってほしいと思います。毎年、十何パーセントの経済発展は大変なものです。もっと落ち着いて、安定成長に向けた雰囲気が出るような経済セッションになってほしいです。過去十数年の間、暴走機関車みたいに突っ走ってきたものですから、もう少し落ち着いてほしいと期待するわけです。

環境セッションは、本当に落ち着いた環境セッションではなくて、ラジカルな環境セッションになってほしいと思います。なぜ、ラジカルかというと、今年は、ポーランドのポズナニで、COP14 (Conference of the Parties: 第14回国連気候変動枠組み条約締約国会議) が開かれています。来年は、ポスト京都議定書の枠組みをまとめる最後のタイムリミットになるわけです。

ですから、環境分野についてはもっと激論を交わしてほしいと思います。意見の対立でもいいですから、中国とインドは入るのは嫌なんだと、もっと共通だから、大意のある責任、もっと正面をきって先進国とぶつかってほしいと、そのようなラジカルな環境セッションになるようにと期待しています。

文化セッションは、最初は余裕を持っている文化セッションだと思っていたのですが、どうも勘違いだったようです。まったく待たなしの文化セッションになりました。とりわけ、張海洋教授、王処輝教授、方李莉教授の発言を聞いて、ここまで待たなしなのかと、非常に印象深いものがありました。

要するに、グローバル化とグローバリゼーションのなかで、民族だけではありませんが、各国、各地域のアイデンティティを消してしまいます。まさに、これからは生態学的な経済学、生態学的な政治学、生態学的な環境学や文化とか、その生態学という言葉が私にとって印象深いものでした。

それではこれから、最後の総括セッション、それから自由討論に入りたいと思います。皆さん、積極的にご参加ください。それでは座長の高橋先生、よろしくお願いします。

○座長 どうもありがとうございました。それでは、今日で3日目になりますが、いよいよ結論と申しますか、締めくくりの段階にまいりました。この間、非常に積極的なご発言、ならびにフロアからのご質問、そして最後はICCSの研究員の報告と、大変実り多い内容ではなかったかと、主催者ながら思っております。

今回のシンポジウムの最後といたしまして、ここにありますように「中国をめぐる開発と和諧社会—和諧は可能か—」が私たちの当初のテーマでした。ここをもう一度振り返りながら、果たして可能なのかどうかというところに絞りながら、1時間ほど時間がありますので、皆さんの自由闊達なご議論をお願いしたいと思っています。

最初に議論の参考としまして、私から簡単に解題というほどでもありませんが、問題提起と申しますか、簡単なまとめに近いたたき台のようなものをお出ししたいと思います。

今回の私たちICCSのシンポジウムのテーマは、「中国をめぐる開発と和諧社会」です。初日の12月5日には、総合討論会を開催しました。そこで「果たして和諧は可能か」という皆さんの問題提起をしながら、パネリストの方々の所見をお話しいただいたわけです。

それをもとにして、昨日から今日にかけて、経

済・環境・政治・文化と4つのセッションに分けて、それぞれの分野からこの問題について取り組んで、議論をしていただいたわけです。ただいまは総括セッションになるわけです。この3日間を通じていろいろと議論がありました。談論風発でしたが、そのような議論を通じて、果たして和谐社会の建設は可能なのでしょうか。これに関して、もし可能であればどのような課題があるのでしょうか。皆さんにまた談論風発をしていただきたいと、自由な議論をしていただきたいと思っています。

この3日間の議論を聞きながら思ったことですが、とてもこれがある1つの方向にまとめることは不可能だろうと思います。私個人的にも、私の知識や能力から言っても、とてもこれはできるものではありません。

したがって、まとめなどという大それたことはいたしません。ひとつ皆さま方が諸個人の間で、それなりに心のなかにしっかりとまとめたければ、それでよろしいかと思えます。それができなければ、また次の課題に向けてお考えいただければと思っています。

初日に、ジャック・ホウ先生の基調講演がありました。このなかで、いくつかキーワードを取り出すことが可能かと思えます。これから、概念をキーワードにしてまとめながら、話を進行していきたいと思えます。最初のジャック・ホウ先生は、もっとたくさんの概念が示されていましたが、まとめるとこのようなことかと思えます。

1つは、経済成長の根源です。彼は、未使用の資源がまだあるので経済成長は可能であるという前提に立っています。したがって、成長は可能です、年率成長7%の成長は可能です、と。これは林毅夫先生の考えを引き受けるかたちで、ご自身も可能であるとおっしゃったわけです。さらに、資源の投入効率を考えなければなりません。これは、どなたも考えることです。

同時に、中国とロシアを比較して、ロシアは非常に性急な、それこそ慌てすぎる改革をして、一時期失敗しました。それに対して中国は、非常にスローな、ゆっくりとした改革をおこない、そして、それが功を奏して成功に至っているのではないかという話をされたかと思えます。

最後ですが、制度改革コスト。これはジャック・ホウ先生のオリジナルの概念ですが、トランスミッション・コスト (transmission cost) です。トランスフォーメーション (transformation)、つまりトランスミッション、制度改革です。古い体制から新しい体制へ移っていく際に、社会が負担しなければならないコスト、これを称して、ジャック・ホウ先生は制度改革コスト、トランスミッションコストとおっしゃったのではないかと思います。

このような5つぐらいのキーワード、概念を使いながら、ジャック・ホウ先生は、中国のこれまでの成功と今後の見通しについて話されました。ご本人もおっしゃっているように、ジャック・ホウ先生は非常に楽道家でいらっしゃいますので、それほど暗い未来を描かれてはおりません。これは、ジャック・ホウ先生の非常によろしい点、大変素晴らしい点だと思っています。この点をめぐり、「和諧」とどのようにつながっていくのかということになるかと思えますので、このへんも含めてご議論いただければと思います。

続きまして、総合セッションで出されたキーワードです。8人の方々から、総合セッションを、私の座長のもとでおこないました。ここで出された、多少重複する点もあるかもしれませんが、勝手に私が選んでおりますので、場合によっては違うというものがあるかもしれません。その際にご指摘いただいて、訂正なりをいただきたいと思えます。

川井伸一先生は、効率、公平、市場と政府、格差。格差は、それぞれ皆さんに共通するものです。ルー・ディン先生は、効率、経済モラル、あるいは不均衡、環境犠牲。環境犠牲のもとで経済成長がおこなわれてきたというお考えです。川井先生とルー・ディン先生は、経済セッションの代表です。

そして、藤田先生が座長を務める環境セッションでは生態系、そして開発。藤田先生がおっしゃったことなかで、私の記憶にありますのは、空間保存という概念です。青海省の実態調査を踏まえてお出しになった概念です。宋献方先生は、東洋思想。開かれた社会という環境問題に深いかかわりがあるわけですが、これとの関係のもとでお

っしゃった言葉です。

それから加々美光行先生ですが、開発政治です。この開発政治は、ご自身のオリジナルの言葉ですが、同時に具体的な解決、問題発見、そしてそれに対する実践的な、能動的な解決をどのようにして主体的に取り組んでいくのかという意味での具体的な解決です。さらに、ビッグ・プロジェクトと経済成長主義（開発主義）。こんにちまでの中国の発展モデルについての1つの側面だと思います。

さらに許紀霖先生です。先生のご発言に、私は大変共鳴するところが多いのですが、勝手に2、3の言葉だけを引き出ささせていただくと、やはり格差と利配。そして、許先生の個性が非常に出ていると思われまます価値観の調和という点です。

張海洋先生は、ご研究のテーマとの関連が強いですが、少数民族、宗教、そして公平と経済改革ということをおっしゃいました。

最後になりますが、文化セッションの周星先生は、文化とイデオロギー、そして文化の産業化、あるいは文化と政府というような、つまり文化の管理、あるいはそれを通じて生じてくる産業化、このようなところに1つの概念を感じられたと思います。

さらに、昨日、今日と、いろいろと個別報告がありました。そして、それぞれの個別報告のなかに、大変貴重なキーワードがあります。ただし、このコメントと個別報告を見たうえでの、ここにありますキーワードは、昨日までの報告を聞いた限りでのことです。今日、午前中の文化セッションの話は、ここに入っておりません。したがって、あとで付け加えていきたいと思ひます。あくまでもこれは、昨日の段階までの個別報告ならびにコメントを通じて拾いあげたものです。

1つ1つを説明すると、また時間がかかりますので、さっと見ていただきますと、先ほどご紹介いたしました、総合セッションで話されたものと似通っているものもありますし、また、重なっていないものもありますし、非常に特徴のあるものもあります。

しかし、実はもっとたくさんの方が話されたのですが、昨日、帰ってからまとめたものですから、時間の都合がありまして十分に拾いきれてお

りません。これを見ただけでも、皆さま方はお気づきだと思いますが、この和諧社会をめぐる今回のシンポジウムは、和諧社会建設に関する、あるいは開発をめぐる百科事典的な非常に範囲の広い、かつ多元的、多面的、多種多様と、すべて「多」が付くような、とてもまとめきれないほど豊富な話です。そして問題提起、そしてまた議論の展開がなされていました。私が申したいのは、そのようなことです。そのためにいくつかのキーワードを出しました。この森羅万象の、とても一筋縄ではまとめきれないような問題が、中国をめぐるって起きているということを一つの共通した認識として、皆さま方はお持ちいただいたと思います。

したがって、これを1つの参考としながら、次の論点へ入っていきたいと思ひます。1つは、和諧の定義は非常にまちまちでした。また、果たして定義などがあるのかどうかという意見もありました。しかし、調和あるいは安定を意味することについては、概ね異論がなかったように思ひます。

では、和諧社会実現は可能なのかという点ですが、可能だとおっしゃった方は、大変少ないです。私にとっては、ほとんどないと言っていいような印象を受けました。

では、不可能なののでしょうか。しかし、そうでもなく、むしろ不可能ではないという意見のほうが多かったと思ひます。そこで、和諧社会の実現は不可能ではないとしますと、何が必要なのでしょうか。そこに議論が移っていくと思ひます。

私は経済が専門ですから、その観点から少し問題提起をしたいと思ひます。何点かあります。1つは、中国が市場経済の後発性の利益を發揮しているかどうかです。私どもは、「中国企業ないしは中国経済の海外進出」というテーマで研究を進めてまいりました。その過程で、ある程度明白になってきたのは、「中国企業の後発性」という点についての注目です。これを企業レベルだけではなく、例えば経済主体、企業以外に政府、そのレベルで、果たして市場経済の後発性の利益をどのくらい享受し、あるいは發揮しようとしているのでしょうか。この点についての疑問がややありますので、そこをこのように書いてあります。

和諧社会実現は不可能ではない。な こが必要か？（課題と展望）

1. 市場経済の後発性の利益を發揮:企業(効率・労働権)、家計(貯蓄)、政府(小さく)、社会(公正・協同)(つまり西側の経験のプラス・マイナス両面の学習)
2. 経済成長(経済改革の継続)。しかし道遠い
★ GDP, \$20,000/FH(韓国並み)はいつ可能か？(現在の\$2,400の8.3倍)
年率7%成長で約20年(27兆ドル、現在のUSのGDPの2倍以上、物価上昇考慮すると更に長く)

★人工的環境破壊=GDPの先食い=その原状回復費用額 (本来はGDPから控除計算)

3. 誰に依る、誰の為の和諧社会か？
4. 実践的取り組みの重要性(社会運動、企業経営、末端行政、農地対策)
5. 国際的交流(山西省から始まった日本の学者、農協組織と農民專業合作社の例など、利益目的でない交流)

例えば政府に関しては、中国政府の経済政策を見ていますと、典型的に古いタイプの経済政策、投資により景気を浮揚していくという。これは日本も同じですが、そのようなタイプです。それが財政の問題を引き起こしているという点は、無視できないわけです。

あるいはまた社会です。私は、社会改革、政治改革、経済改革、国際改革という4つの改革のうち、経済改革はかなり成功していると考えています。最も遅れているのが、おそらく社会改革ではないかと思います。このなかに文化も入る可能性があります。特に公正、あるいは公平という点です。ただしこの点は、日本も含めた西側の経験のプラス・マイナスの部分についての学習をする必要があると思います。

2点目は経済成長です。経済成長の代価、経済成長によって和諧社会が実現していく、あるいはそれに近付いていくという点はよくわかります。ただいまの宇都宮君の報告にも、最後のセッションで話がありました。しかし経済成長の道のりは大変に厳しいものがあるということです。

ジャック・ハウ先生も、今後25年間、7%成長が可能であるとおっしゃいました。では、7%成長は何を意味するのでしょうか。例えば、現在

中国の1人当たりGDP、あるいは国民所得は2,400ドル程度です。例えば、韓国並みに2万ドル水準になるには、何年を要するのでしょうか。つまり、2,400ドルの8.3倍が2万ドルですから、年7%成長で約20年かかります。ただし、これはもちろん物価の上昇は考慮外にあります。現在、アメリカのGDPは13兆ドルですので、その倍以上ということになります。

この20年間の7%成長が果たして可能なのでしょうか。あるいは、これを追求することが果たして目標とすべきことなのでしょうか。この点についての議論をもっとする必要があります。

3点目は環境破壊の問題です。環境セッションの議論と報告を聞きながら、大変衝撃を受けました。実は人工的な環境破壊と自然的な環境破壊は別ものです。ここで問題にすべきなのは人工的な環境破壊です。

人工的な環境破壊はGDPの先食いです。なぜならば、人工的に破壊された環境を元に戻そうとしますと費用が必要です。その原状回復をするには費用が必要です。その費用は誰が負担するのでしょうか。結局、GDPから負担するしかありません。人工的な環境破壊を放置したままでおこなわれた成長は、その原状回復に必要な額だけ、本当は考慮しなければならないわけです。これがなされていないわけです。したがって、社会的に見ますと、これは宇沢弘文先生もおっしゃっていることですが、社会的な費用として勘案すべきことです。

しかし、日本のGDPも、アメリカのGDPも、中国のGDPも、それは考慮していません。しかし、私たちは既に、それを考慮せざるをえないという段階に来ているように思います。

それから4つ目、今日の文化セッションで、初めて「主体」という言葉を何度もお聞きしました。昨日までの議論のなかでは、「主体」という話はほとんど出てきません。今日、ご報告をなさった大多数の方が、誰(主体)に、誰のための、誰によるという、誰々という主体の議論がかなり出てきました。

これで私は、実は救われたような気がしたわけです。したがって、もう一度、私たちは、誰のための、誰による和諧社会の実現を目指すべきなの

でしょうか。ここを考えてみるべきだろうと思います。

さらに5つ目は、実践的な取り組みの重要性です。これは、昨日、あえて協同組合運動というテーマで話をしました。運動の重要性です。中国は痛いほどいろいろな経験をしすぎているわけです。したがって、ソーシャル・ムーブメント (social movement) という、西側社会ではごく自然の動きが、非常に冷たく見られるという風潮がありますので単純には言えませんが、近代化して市場経済がある段階へ来ますと、必ず通らなければならないという経験です。この経験抜きにして、本当の市場経済や安定した近代社会を築くことはできないと思っています。この点は、企業経営でも、あるいは末端の行政でも、あるいは農地対策、農業部門でも当てはまるのではないかと思います。

最後になりますが、国際的な交流です。環境セ

ッションの方々の、中国における調査研究、あるいは経済セッションもそうですが、あらゆる文化、あるいは社会をめぐって、中国と交流をしながら相互の学習を通じて問題点をお互いに出していき、そこで議論し合い、1つの方向性を考えていくことが、国際的な交流だと思います。このような視点の重要性をあらためて提起したいと思っています。

以上、これは私の個人的なまとめです。これから約45分ありますので、昨日までご発言する時間がなかった方も、あるいはもう少し深く聞いてみたいと思われる方も、あるいはセッション間、あるいは同じセッションの方々でも結構です。そしてまた、フロアの方も含めていただいて結構ですので、ぜひ一体的な議論をここで展開していただきたいと思っています。

では、よろしく願いいたします。最初に、加々美先生。

自由討論

○加々美 高橋先生が、あまり政治セッションについて言及されなかったので、少しお話しします。

ご記憶かと思いますが、私がお話ししました協同主体的、英語で訳すとコ・ビヘイビオリズム (co-behaviorism) という方向で、「主体」を問わねばならないことを、政治セッションでもお話ししたつもりです。その関連で、高橋先生の協同組合運動、それから朱安新先生の社区建設が、その主体にかかわる問題を提起したという意味で言及させていただいたわけです。

一番大きな問題を言いますと、和諧は目的なのか、手段なのかという問題があります。つまり、それこそ誰のための和諧なのか、という以前に何のための和諧なのかという問題です。私は少なくとも政治セッションで、皆さんがお話しなさったことも含めて感じていましたのは、経済成長を持続するための和諧、つまり成長7%を持続するための手段としての和諧では、やはり少し問題があるのではないのでしょうか。

もう1つは、和諧は誰のための、何のためのと

いうことがあるでしょうけれども、まず基本的に確認しておかなければならないのは、対立というもの、現実に社会的なさまざまな紛争によって存在している現状のなかで、それは経済格差でもいいですし、環境問題でもいいですし、文化の問題でも、もちろん政治の問題でも、さまざまな対立要因をはらんでいるわけです。

その対立要因をはらんでいるという現状を踏まえて「和諧」ということを言う以上は、そもそもその対立構造を踏まえない「和諧」についての議論は、単に抽象論に終わってしまいます。ですから、当然議論そのものは現実の対立構造に踏み込まなければなりません。私は、対立は手段の問題ではないと思っています。それは価値の問題です。

価値の問題であるがゆえに、近代化の政治理念として3つの理念があり、それは「自由、平等、友愛」と言われるものだということをお話ししました。実は、それ自体が、やはり目的でなければならぬという意味は、自由によってもたらされ

る競争が、自由のパラドックス (paradox)、あるいは市場のパラドックスを引き起こし、同じように平等と言われるものが、計画経済のなかで一種の特権を生み出し、またある意味では集権制を生み出し、そのパラドックスによって崩壊を遂げました。

自由主義は、辛うじて自由と平等の争いにおいては、フランシス・フクヤマの言い方ではないですが、自由が勝利したわけです。ただ、この世界恐慌のなかで、かなり厳しい挑戦を被っているわけです。そのなかで、友愛が語られるときに、友愛は自由を救うための手段であってはならないということです。

ですから、「開発」という言葉のなかに、もともと経済成長主義一辺倒、あるいはビッグ・プロジェクト主義一辺倒といった方向性があることと、価値的に見て、倫理価値的に見て、「和諧」が原理的に対立する要因をはらんでいるということ認識しなければなりません。

むしろ、これを自由や平等が、一方で市場政府、市場経済、市場システムという社会システムを生み出し、また平等が計画システムという1つの制度化を生み出したように、「和諧」もある一定の制度を生み出さなければなりません。ただし、これは中空から、どこか天空からそのような制度が降りてくるのではなく、現実に泥まみれになっている対立構造のなかから切り出していく以外にはないわけです。

その制度は、ハウホアンスが述べている公共空間というものをつくり出すことです。具体的に言えば、朱安新先生、最もその問題に切り込んでいたのは張玉林先生だと思っていますし、また今日の上田先生の報告も生の現実に切り込んで、そのなかで問題解決を目指そうとする研究者の意志を感じます。

その問題解決のなかからこそ、その1つ1つの制度の萌芽が見出されていくのであり、ICCSの基本的な方法論が問題解決型の研究を目指す、単なる均一的な研究ではないということの本旨として6年間やってまいりました。では、どのような具体的な法案があるかということになれば、これはまだまだ研究が不足しています。

例えば、1つの個性ある文化が消滅したうえで、

表面的な和諧がなされるという解決は、決して私たちの、あるいは本来、私たちが定義している和諧の定義ではないということです。その点を確認していただきたいと思います。すみません、長くなりました。

○座長 はい。ほかにいかがでしょうか。はい、では。

○会場(一般) お茶の水女子大学大学院のオオハシと申します。私はジェンダー研究という立場から中国を見ています。普段はどちらかというと、シンポジウムとしては、中国のものに出るよりは、もう少し一般的なジェンダー研究のところにいることが多いですが、もともと自分自身は北京をフィールドに、農村出身の家政服務員 (jiazheng fuwuyuan)、日本語では家政婦さんという言い方でしょうか。その人たちの研究をしています。

まず感想になってしまいますが、簡単な言い方をしますと、開発の問題は、必ずジェンダーを一緒に切り口で問うことが主流になっていると思います。その視点がないということが問題だと思います。それが、なぜ問題なのかということが、おそらく共有されていないのではないかと思います。

例えば、私が研究をしている農村出身の女性が、家事労働を都市でやっているという問題、ただ家事を分担するのが大変だからという面もありますが、家事労働という言い方のほうが一般的だと思いますが、ジェンダーの枠組みでは、「再生産労働」という言い方をします。私たちの日常生活をどのように明日も明後日も、1年後も10年後もおこなっていくか、あるいはもっとよりよくおこなっていくかという視点で、家事・育児、介護、あと再生産労働と言うときには、生殖、子どもを生むということもかかわってきます。

その視点で見たときに、中国で、特に三農問題が言われるようになってから、例えば、2、3年前から、労働力移転のことがすごく言われるようになっていきます。農業部のプロジェクトの1つに、女性の家政服務員としての訓練をおこなうことがされています。そのようなことが女性のエンパワーメント (empowerment) として語られる一方で、都市の再生産、都市で生活をしている中間層以上の人たちの生活を再生産するというところに

つながっています。それは一方で、もちろん都市における和諧という問題につながっているかもしれませんが。その階層性を再生産するというのもあると思います。

園田先生の報告を聞いて思ったのですが、園田先生だけではなく、今日の文化セッションの面で、主体の話、それから誰のための、誰がおこなうような和諧かという問題を問うときに、結局、再生産労働の訓練を誰のためにおこなっているのでしょうか。彼女たちのエンパワーメントと言うときに、例えば、農村では女性が訓練を受けて都市にやってくるときに、農村における再生産労働は空白になるわけです。その部分にまで配慮したうえで和諧という問題を見ていくべきではないのかということ、一種、問題提起になりますが、コメントさせていただきます。

○座長 どうもありがとうございます。確かにジェンダー問題は、今回は言葉としてもまったく出てきませんでした。ご指摘いただいて大変ありがたいと思います。まさに、そのとおりだと思います。

ほかに、例えば今回のシンポジウムを通じて、このあたりをもっととか、あるいはこの点が抜けていたというところがありましたら、ご指摘いただけますでしょうか。王先生。

○王处輝 这两天开会我的感触非常深，爱知大学的中国研究很有影响。我在想一个问题，包括我们这次会议讨论的主题，和谐社会，不管讨论什么我在想，爱知大学 ICCS 的目标是什么？我很想就这个问题谈谈我的想法。中国人研究中国现代社会越来越现实，我们搞社会学、人类学的都这样，尤其社会学研究中国现实的平等问题、贫富差距、基尼系数、恩格尔系数、社会阶层等是很多的。我想日本的中国学研究以爱知大学为基地，以加加美先生、高桥先生为领导人的这样一个基地，目标是什么？我想他应该是深入了解中国，影响中国的发展，对中国和日本之间的合作关系，相互了解，提出新的见解，为世界和平和亚洲发展做贡献，这是目标。我现在感觉我们在这里讨论，但是这种声音传达不到中国去。我建议爱知大学中国学研究应该把一种集体的声音传达到中国去，影响到中国对自己问题的认识。包括日本学者对中国问题的认识达到什么程度了，告诉中国我们是怎么看的，让中国

人做进一步的反思，发展中应该注意什么或可能发生什么情况。这一点上我觉得我们还有很多工作需要做，共同研究是十分必要的，要集中传达一种声音，形成一种比如说《中国发展报告》，告诉中国不管对还是不对，这是我们研究的结果。从一些具像的研究到一些总体的研究，发出一种集体性的声音。我建议爱知大学在这方面做出更多的权威性的工作。

○座長 ありがとうございます。今の王先生のご指摘には、私たちがぜひ応えていきたいとは思っています。私たちは、今回のシンポジウムでも中国の先生方をたくさんお招きさせていただいています。そのことも含めて、確かに不十分な点がありますが、日本で交流をする機会を持たせていただいているわけです。この結果につきましては、私、冒頭の挨拶のなかで申し上げましたが、できるだけ世界言語にして、要約版をぜひ刊行していければと思っています。

それでも、なおかつ不十分であることは承知しておりますが、今後、どのような方法が一番いいのか、また先生のお知恵などを借りながら改善をしていきたいと思っています。

ほかにいかがでしょうか。できればデュアルディグリー・コースの学生は何かありませんか。南開大学と中国人民大学から、せっかく何名かの学生が来てくれていますが。では、また何かありましたらあとで。ではほかの方。

○会場（一般） 3日間、おかげさまで大変有意義なときを過ごさせていただいて、感謝します。三重大学を退職して、三重大学と愛知大学の非常勤講師をしています今尾雅博と申します。

私がリタイアしたときに、江蘇大学の学部長が来たものですから、本を1万冊贈りました。何の話をするのかと思われるでしょうけれども、これはあとの話と関係があります。私は経営学が専門です。NHKの番組が中心ですが、学生にビジュアルなものを見せることを主義にしておりましたので、あまり日本の学生の悪口を言っは悪いのですが、私もそうでしたが本を読みませんので、非常に「Seeing is believing」です。ビデオも1,500本ぐらいどうですかと言ったところ、ビデオと一緒に本を送ると、本がストップするかもしれないと、江蘇大学商学部長の秘蔵っ子のり先生

がおっしゃいました。それで今、私の研究室の前にとまっています。

昨日、私が刮目したのは、毛里先生のレジュメ 115 ページの言論の自由です。「この表は私がつくったものではありません」ということをおっしゃいましたが、この信仰の自由、市民的自由度とか、やはり一番その核になる問題はここではないかなと思います。

1 週間ぐらい江蘇大学に滞在して、VIP 待遇で大変ありがたかったのですが、ちょうど四川大地震のあとでしたから、テレビを見ても、そのことと公的な情報しか流れていませんでした。日本のような過剰な、暴力的な犯罪的なことが多い民放放送とは違い、まったく逆です。やはりこのへんが今回のテーマの和諧社会と非常に関連があるのではないかと思います。

このテーマを見て、初めは何のことかわかりませんでした。語義的にもものすごく和諧という言葉が研究されましたし、やはり愛知大学はものすごいなと。これは1つの感想です。

皆さま方は、この核心的なことについてももう少し述べたいと思います。私は、AIB (The Academy of International Business: 国際ビジネス学会) に参加して、インド系のジャガディッシュ・セス (Jagdish. N. Sheth) 先生が、2年前の北京大会で、「19世紀はイギリスの時代、20世紀はアメリカの時代、日本はバブルでつぶれてしまったから、21世紀はチンディア (Chindia) の時代だ」と言われました。やはりリーダーになっていかなければいけません。その意味も含めて、批判的な悪い意味で言っているわけではなくて、その問題について、どなたかにお教えいただければ大変ありがたいと思います。以上です。

○座長 話がちょっと、いろいろと多岐にわたったように思いますけれども、1点でよろしいですか。

○会場(一般) 日本が不幸な戦争に陥ったのも、やはり国民が本当の情報を知らなかったからです。内村鑑三、新渡戸稲造のような人がもう5人ぐらいいたら、戦争は起こらなかったと聞いたことがあります。それとも関連します。ですから、私の言ったことは、少しわかりにくいかもしれませんが、わかる人に答えていただければ

と思います。

○座長 では呉先生、今のご質問に。申し訳ないのですが。

○呉曉波 我是中国浙江大学的吴晓波。利用这个机会我说一说我的观点，因为我参加了一些和印度学者共同进行的研究。我们前面参加了中印的一个项目是 Globalization and Urbanization, 讲全球化与城市化，因为这两年国际上对中印关系都很重视。我们的项目是美国纽约 New School University 成立了一个研究所，叫印度中国研究所 (India and China Institution, ICI)。Chindia 这个词是印度人先提出来的，其间我们去印度做了两次调查，所以也是有一定的了解，但是并不是很深。刚才的问题我简单的说一下，我感觉中国和印度过去很多人感到两个国家差不多，中国人觉得中国跟印度差不多，人口很多，过去很穷。印度大概也是这么想。但是去了以后，我感觉差别很大，非常非常大，很不一样，什么不一样呢，很难说得清。我们从印度回来，回到上海，在上海东方电视台作了个节目。有5个中国人，5个印度人一起，每个人要讲一句，就是这一次合作之后的感受是什么，讲印度的发展与中国的发展的区别是什么。当时我举了一个牌子，说中国现在是革命后的追赶的时代。跟印度的区别是，印度是一个革命前的摸索的时代。为什么，因为我看到一个很重要的问题，就是社会的基础结构非常不一样。在印度，特别是他的 caste system, 种姓制度仍然存在。有20%的人是 untouchable, 就是不可接触的人。他们生活的状况非常的糟糕，几乎是看不到什么希望。但是中国不一样，我们看中国的革命付出了很大的代价，破坏了很多的东西，但是有一条，他也破坏了原有的阶级构成。所以使中国的平民百姓看到很多的希望，可以做很多的事情。特别是我们在浙江省很明显，小企业非常多，做小生意什么的都可以做起来。所以这个里面我们看到有很大的不同，这种心态不同。我离开印度前我们开了一个告别的晚宴。当时印度的学者问我的感受是怎么样，坦率地说，我说，“I feel very sad.” 我感到很凄惨。主要的原因是什么，不是说老百姓很穷，中国也有很穷的老百姓，我觉得他们很糟糕的一件事，就是他们的精英，Elite, 他的社会精英，特别是知识分子精英，跟老百姓，社会底层的人脱离的太厉害，脱离的太严重。这个是我认为的一个很大的区别。

从民主化来看，印度的民主化应该说从体制上要比中国完善，他的法律制度都很完善，但这就延伸出一个问题，就是我昨天做报告没有时间展开的，我就说一个。刚才高桥先生总结了几个关键词，我认为还有一个很重要的关键词就是“能力”。我认为能力非常重要，给了每一个人机会，但是每一个人获取机会的能力不一样，当这种力差别非常大的时候，那会成为很严重的社会问题。那些受到很好教育的人，跟那些没有受到教育的人，获取能力的差别会非常非常大，所以他又进一步加剧了社会的分化，加剧了社会的矛盾，这个是比较重要的。但是中国从毛泽东时代开始，通过共产党政府的手来调节这样的机会，但这个调节过程中，反而有机会的不平等，反而有不平等，所以说问题很复杂。

我还有另外一个观点，我认为应该是基本的关键词，就是 evolutionary。讲这是一个逐渐演化的过程，成长的过程。中国也在演化，印度也在演化。我明年还有一个和印度合作的项目，印度政策研究所跟我合作，我作为中方负责人，印度方面有一个人作为印方负责人。这是一个由加拿大资助的项目，叫 Innovation System for Inclusive Development，就是创新系统如何帮助包容性的成长，就是让那些非主流的人，他们如何从创新中受益，他们的能力如何成长，更好地获取发展的机会。我们要作对比的研究，相信会有更多的东西和成果。

谢谢！

○座長 ありがとうございます。ほかに、どうでしょうか。まだ多少時間がありますので、お話いただきたいと思います。では簡単をお願いします。そのあと、張先生をお願いします。

○会場（一般） 私は田中忠仁と申します。大阪外国語大学および京都外国語大学、現在は有限会社で仕事をしています。中国のフィールドワークをやっています。加々美先生がおっしゃった「友愛」というキーワードが、最後のサマライズ（summarize）で抜けていました。また、それが誰のための和諧であるのか。おっしゃるように、和諧は必ず対立をもたらします。しかし、中国は古来 5,000 年、いろいろな対立がありましたが、「和諧」という素晴らしい言葉を、2002 年の、正確に言えば 1992 年から江沢民氏、特に鄧小平氏もそうですが、江沢民の衣鉢を継ぐ胡錦濤氏が、

それをスローガンとしています。和諧なしに中国はないとおっしゃっているように、私には聞こえます。

初日に、私は先生の言葉を引用しました。「神の見えざる手」。これは高橋先生も経済学をやっておられましたから、最後のところで経済学から出てきたものです。これは繰り返しませんが、日本には貯蓄が 2,700 兆円あると言われていています。これは単純計算で言えば、ごく最近発表された数字ですが、為替レートが 100 円のレートで 2,700 兆円、ということは、国の予算が約 80 兆円から 100 兆円としますと、27 年分あります。このような国は世界にはありません。

ですから、今の中国に対し、いろいろな意味での和諧を、過去の戦争の歴史などいろいろありますが、その和諧のための、中国自身でも足りない場面があったとしたら、それを友愛の精神に基づいておこなっていくということを、次の課題として提案されていたはずで、それをぜひ最後の、またそのことについてコメントをいただければ、また来年の課題として、中国でおこなわれる、あるいはまた愛知大学でおこなわれるならば、私もそれに参加したいと思います。

そのような友愛の精神は、やはり中国の国家予算をはるかに超え、全地球規模でやるべきことです。それをぜひ課題にしてほしいということです。

○座長 ありがとうございます。残りはのちほど、時間がありましたらお願いします。では、張玉林先生。

○張玉林 非常感谢，我有点不好意思了，又得到一次发言的机会，我主要是受刚才吴教授发言的启发，还有回应一下这位先生。

我觉得在我们讨论和谐的时候，我们是不是也尝试着把这样一个目标或社会理想放得更宽一些看。如果按照我们一般意义上理解的和谐，那么今天世界上哪一个国家可以定义为是和谐社会，包括日本在内，当然对于日本我不是太了解。我想谈谈最重要的两个大国，美国和印度可以说是世界上最大的和第二大的自由和民主的国家。美国是不是和谐的，印度是不是和谐的，我自己没有结论，但是从最近的事情来看，印度是不和谐的。最大的民主国家，但是 1 亿 5 千万穆斯林，应该说是受到社会心理歧视的。这一点怎么去理解。我提出这个问

題の意味是什么呢，就是当我们站在国外，或者站在国内讲中国缺少民主和自由的时候，首先他是个客观现实，我本人的研究也是受到这方面的影响，我对这个不自由不民主也是非常反感，但是我觉得他不是最重要的。试想一下，即便中国有了美国式的或者是印度式的民主，我觉得这一点是可以的，是时间的问题，也可能20年，也可能30年，或者说22世纪，这是时间的问题，是有可能的，但是到时候会怎么样？这是一个问题。再一个问题，包括环境破坏，包括价值的问题，他是超越国家的，超越民主和自由的，是另外一个层次的文明的问题，这一点整个世界都是如此。我觉得我受到今天上午的人类学讨论的启发非常多，我觉得我们是不是应该跳的、站的高一些，看待这些问题。谢谢！

○座長 貴重なご意見です。張先生に一言、30秒ぐらいでお答えしたいと思います。昨日、毛里先生の発言のなかにもあったと思いますが、今回、中国を対象にしておりますが、この中国に対して私たちが注目している現状は、別に中国に限ったことではないわけです。アジア全体に共通する部分がたくさんあります。同時に、中国が他の国に対して不安定さを誘出するというか、与える影響度も日まじに強まる、それだけ中国は大きな存在になってきているわけです。したがって、1つには中国に注目せざるを得ないということもあります。あわせて、逆にアジアの国々が、あるいは国際社会が中国に与えるという相互の影響が日まじに強まってきていることを了解したうえで、この問題を扱っています。

したがって、いろいろな国々との比較も大変大事になってくると私は思いますので、張先生のおっしゃることは基本的に賛成です。では、そこでお手を挙げていた人はいませんでしたか。

○会場（学生） 非常感谢能给我这样一个机会让我来提问。我是中国人民大学的博士研究生，是ICCS双博士学位项目的交流生，我叫王亚红。我在前几天听研讨会的过程中学到了很多。我也有一个疑问，就是在讲的过程中，很多老师都提到和谐是不可能实现的，至少有两位老师提到了这一点，我的想法也不是很成熟，只是我个人的看法。我觉得和谐不应该是一个静态的东西，不应该是一个绝对的东西，他应该是一个动态的东西。如果说我们跟过去的5年比，不和谐的成份减少了，我觉

得可以提我们实现了这个阶段的和谐。

另外一个，我有一个倡议，我觉得既然这么多学者都聚集在这里，都来关心中国的问题，关心中国的和谐问题，是不是可以由不同领域的专家，共同来研究。比如说从经济学，从政治学，从社会学，从文化各个领域，是不是可以设计一套，从自己这个领域来看，我这个国家、社会的和谐是什么样的，设计出来一个指标。从自己这个角度，怎么样来衡量和谐，设计出这个指标以后，我们是不是还可以设计出不同阶段的目标，我觉得不同阶段的目标应该是不一样的。在中国，因为我是研究中国的农村经济问题的，所以我有一个很深的感受，就是中国的很多问题实际上都是停留在一个政府的方向性的东西上，很多东西喊了很多年，但是没有切实的实现。比如说中国的“三农”问题，中国涉及到“三农”问题，到目前为止，已经出了十个“一号文件”，但是中国的“三农”问题目前是越来越严重了，而不是越来越轻了。所以我觉得如果大家关心这个问题的话，不应该是观念上的倡导，我觉得应该是具体做一些什么。我是有这样一个倡议，希望各位专家是不是能从自己的领域设计出来一套指标体系，然后确定目标，然后找出一定的方案，给决策者多一种选择。谢谢大家！

○座長 大変建設的な意見でした。お答えいただく方が、実現不可能だとおっしゃった方が2人いるという指摘でしたが、もしその方がいらっしゃいましたら。

みえないようですので、今の大変具体的な方策に関して、いい提言、提案だったと思います。それでは、張海洋先生。

○張海洋 谢谢高桥先生，我通过参加这次会议也是获益良多。我有三点建议。

第一个，我觉得在关键词中把“经济改革”去掉，然后一定要加上一个“文化公平传承”。传承两个字，就是让各个民族的文化都能延续下去，让各个民族的祖先都不要断了香火。我觉得这个是非常重要的。

第二点就是关于和谐社会能不能实现，我觉得重要的是我们在贯彻和谐社会理念的时候，在很大程度上，就是这次开会，经济学家一直在往前看，但是做文化的人都有点向后看。向后看非常重要的一点，就是我们救灾和抢险。和谐往前走到了什么程度，我们讲上不封顶，但是我们下面一定要保底。

就是哪些个地方在溃烂。一个房子如果有烂的地方，再好的楼也会站不长久。我们要巩固那些已经暴露出来的很快就要烂掉的地方。我觉得少数民族的文化，少数民族的权益，少数民族地方的生态环境，是最紧急的时候。中国的国歌是抗日战争时写的，但是我愿意说中华少数民族到了最危险的时候。所以大家是要在这方面多下一些功夫，多下一些力气，因为这关系到我们大家共同的良心。高明洁老师，今天上午评议，说一个汉人替少数民族说一点话。我最想做的是什么？是我的孩子将来长起来的时候，也许汉人没这么厉害了，但是也希望有人能替他们说话。我们人类互相帮助，我觉得这也是一种和谐。

第三点小的建议，我知道爱知大学这样好的学校一定是和南开大学、中国人民大学有这样的学生培养的关系。我觉得在中央民族大学，中国少数民族学生的处境，比如说他们自己的家乡、家园、祖先，都有这么困难的时候，如果爱知大学能够同中央民族大学合作，这里面有学生过去进行合作，那里有学生过来吸收一些各个方面的经验，来加强他们与主流社会对话沟通的能力，我觉得也是非常重要的。这一点务必请各位领导、东家、董事，帮助想着。

谢谢！

○座長 ありがとうございます。では、あと2人の方をお願いします。

○会場(一般) どうもありがとうございます。我是爱知大学国际问题研究所的安達満靖。日本語で話します。3カ月前だったと思いますが、このシンポジウムの題名を見て申し込みをしましたが、やはり題名には難しさがありました。

例えば「開発」という言葉は、私が覚えている限り、以前愛知大学にいましたので、佐藤元彦先生が非常にこの言葉に関しては敏感な方ですが、どちらかという「開発」という言葉よりは「発展」という言葉を使ったほうがいいと、この言葉には上から何かを仕掛けるというか、弱い人に対してやや冷たい印象があるということをおそらく20年ぐらいは授業で教えられていたと思います。今回は、参加されていなくて非常に残念です。

もう1つの「和諧」という言葉は、3日間参加しまして、最初に説明がありませんでした。やはりわかりにくいという質問があったと思います。

5年ぐらい前に、ここで筑波大学の若い研究員の方で小嶋華津子氏が、組合のこの報告をしていたときに使われましたが、「和諧」という言葉は、日本では誰もが知っている言葉ではないです。日本語でもないです。まず言葉の意味を説明したうえで議論を進める必要があったと思います。

ですから今日は、やはりスタートラインに立ったと思います。私の印象ですが、ここ10年、中国研究者が、収入の格差、貧困の問題に関しては非常に冷たかったです。ですから、これは詳しくは言いませんが、今日をスタート時点にして「和諧」という言葉をしっかりと定義づけをして、何が問題かということをはっきりと明かにしていく必要があると思います。

それを解決するためには何が必要なのか。例えば、人民代表大会の政治協商会議を使うとか、共産党以外の方向です。あるいは司法制度を使う、農民が官を訴えるということ。

もう1つはメディアを使う、例えば上田先生が研究テーマにされているNGOを使う。このような中間組織を使うにはどうしたらいいのでしょうか。解決方法を絞り込んで、調べたうえで、どのようにしたら問題を解決できるかということを探っていくかといけません。

このようにいろいろ「和諧」という言葉を使って問題を広げても疲れます。ですから、少なくとも、今日参加された方は、「和諧」という言葉運び屋にならないように。この言葉だけを、パソコンでワードなどを使って張り付けるように広めないで、やはりこの言葉は日本語とは少し違う、みんなと話し合うとか、みんなと平等になる、一緒に食事をする、その中国語には意味があると、しかし、難しいということを伝えていかないと誤解が生じると思います。それが私の感想です。以上です。

○座長 ありがとうございます。それは、あえてそのような方法をとっているわけなのです。今日は3日目になりますが、大変難しいことであって、政府も定義していないのです。いわばそれは、投げかけているわけです。そのところを、どのような立場で、これを見ていくのかによって解釈も当然違ってきます。

「開発」という言語についても似ているところ

があります。私が冒頭で言いましたように、これは1つの方向を語り、解決の方向が全員一致するかたちでは出ないものだと思います。ですから、まず議論するところに今回の意味があると私は思っています。今後、また機会があれば、今、おっしゃったような、より具体的な方向が見えてくるような1つの方法もあるかと思いますが、これは実に難しい点です。最後になりましたが、お一人いらっしゃいましたね。

○会場(学生) 大家好，我是来自南开大学的，我叫余升高，也是 ICCS 双重博士学位的学生。听了这次各位专家高水平的讲演，觉得受到了很大的启发。在这些讲演当中，有一个很深刻的印象就是，我们在谈和谐的时候政治领域的专家从公平、正义的角度来倡导和谐；文化思想这方面的专家更多的从价值文化的角度，从人的内心的自我和谐的角度来探讨和谐社会；经济领域的专家从经济的发展很多模式、数学公式来探讨；环境组的专家则从人和自然环境的和谐来探讨这个问题。我感觉这本身也是社会发展的实际情况的一个反映，中国是如此之大，人口是如此之多，历史又是如此之长，各种不同的利益集团都强调不同的利益，不同的人，都从自己的角度看这个国家的发展，强调自己的方面。在特定的条件下，中国很多发展是不可避免地具有矛盾的。比如说我们要强调经济的发展，我们会考虑到财政税收、教育、医疗这方面的问题，但和环境这块可能现阶段就有矛盾。其它方面也是，我们要谈到保护少数民族文化的时候，这个时候当地的经济发展又是一个问题，等等。包括各位专家的观点也是存在很多矛盾的问题。中国实际发展也是这样。我的观点与王亚红的观点正好是相反的，她是觉得每个专家从自己的角度列一套指标，社会就按这个来发展。但如果只从自己的领域来列出指标，如果分为三大领域，政治、经济、文化，那这三大领域的指标绝对会是很冲突的。我们的学术有不同的专业不同的领域，但社会是一个完整的社会，所以要探讨和谐社会这样一个整体的事物，我们应该更多地从学科的交叉，从不同的角度来探讨这个问题，如果各个领域的学者都能有一个比较一致的看法，都能看到自己领域的合理的边界的话，三大领域政治、经济、文化能协调的话，这样能更加和谐一点。

至于能不能建成和谐社会，刚才王亚红同学

也提到了有两个学者认为是不太可能的。我感觉和谐是一个应然，就是应当怎么样；实然就是实际是怎么样，所谓存在的问题就是应然和实然的这种差距，所谓的和谐应该是一个动态的，就是实然逐渐地趋向应然。谢谢。

○座長 どうもありがとうございました。時間がまいりましたので、自由討論の時間はこれにて終了いたします。私が最後に申し上げたいことは、この機会は中国を対象に1つの大きな問題をテーマにして、3日間取り組んでまいりました。常々、私たちは日本人であるという意識を、どのようにこれにハーモナイズさせていくのか。ここには、中国の先生方、そして私たち日本人、さらにはほかの国の方もいらっしゃいます。このような多様な国籍を持った、あるいはさまざまな考え方を持った人たちが一堂に会して、中国の和谐社会、あるいは開発と和諧をめぐる議論をしてきたわけです。

問題は、このようなテーマを果たして共有できるかどうかという点です。最初から、私だけではありませんが、不安を持ってまいりました。つまり、共有できるかどうかということは、これは現代社会において共通の問題があるかなしか、つまり日本に住んでいようが、あるいは先ほど張玉林先生がおっしゃったように、インドであろうが、アメリカであろうが、果たしてこれは中国の問題だけとして片づけることができるかどうかということだと私は思います。

したがって、私の専門から言いますと、現在の市場経済はもう行き詰まっていると思っています。従来のやり方が、これからどのくらいもつかどうかという瀬戸際に来ているというならば、確かに現象は違うかもしれませんが、おそらく人間として受けとめるべき課題は同じでしょう。そんなに差はないと思っているわけです。そこに、今回の問題をここで取り上げる意味もあったのではないかと思います。

したがって、この問題は中国だけの問題としてではなく、われわれが人間としてどのように向き合うかという問題を提起しました。それについて私たちは、それぞれ違った立場から議論をしてきたように思います。

以上をもちまして、自由討論の時間を締めさせ

ていただきます。どうもありがとうございました。

○司会 高橋先生、ありがとうございました。これですべてのセッションを終了させていただきます。

最後に、われわれのデュアルディグリーの学生

からの問題提起もありました。また、会場の皆さんからもさまざまなリクエストがありましたので、このICCSを立ち上げた加々美光行前所長から、閉会の挨拶をしていただきたいと思います。

閉会挨拶 加々美光行（愛知大学）

突然、指名されましたので、あまり準備はありませんが、5分ほど時間をいただけるということですので、少しまとめた話も入れて、閉会の挨拶にさせていただきます。

最初に、「開発」と「和諧」の定義という問題がありました。「開発」については、私なりの定義をお示ししました。ですから、誰も開発について定義を示さなかったわけではないということ、もう一度ご確認ください。

「和諧」については、このようなことです。これはダイナミクスです。「和諧」という概念に、静態的 (static) な目標、つまり指標というものはありません。ある決まったかたちに社会がなれば、それで社会は動かないというものではありません。そこから再び対立や矛盾が引き起こされないという社会は、本来活力のない社会です。必ずどのような社会も一定程度のハーモニアスな社会を一時的に実現しても、必ずそのなかからさまざまな社会矛盾を引き起こします。

したがって、その新しく起きてくる社会的な矛盾を克服していくレジーム、つまり一種の規制、システムをつくりあげることが「和諧」なのです。

ですから、「和諧」には絶対的な目標は絶対にあり得ません。そのようなシステムはどのようなものであるかということ、皆さんに提案していただきたいのです。

例えば、民族問題ではチベットで大きな問題が起きております。もちろん環境問題でもものすごく起きています。それぞれの環境のなかの、例の人文資源など、さまざまな概念が観光に関しても言われました。生態環境についてはむしろです。

それぞれについて、どのようなシステムをつ

っていくのか、それは協同組合運動でも構いませんし、社区というシステムでも構いません。あるいは、さまざまな公共空間、NGOでも構いません。そのようなものを1つ1つ積み上げていく努力が大事です。

それから、オオハシさんが少し言われましたジェンダーの問題は、このICCSの今までの活動のなかで取り上げられなかったわけではありません。たびたびお名前を挙げて恐縮ですが、張玉林先生は、中国の農村社会は消滅すると、村落は消滅しつつあるという驚くべき提案をICCSの過去の会議でなされております。

そのときに、農村における女性の自殺者、婦人の自殺者が極めて増えているという指摘をなされました。それは、今回の討論のなかでもありましたように、「三ちゃん農業」のなかで、例えば身障者も農村に残りますね。もちろん、老人も残るわけです。しかも寝たきり老人までが残ります。そのなかで最も大きな負担を被るのは女性です。

これは、かつて1960年代にウィリアム・ライヒ (Wilhelm Reich) が言ったことですが、さまざまな社会的矛盾のなかで最も根底的な矛盾はジェンダー的な矛盾です。つまり女性の抑圧であるということを使ったわけです。ご存じのように当時、女性抑圧は、男性の解放もなければならぬ、女性の解放だけでは駄目だといったような問題が提起されてまいりました。この問題は、むしろICCSのテーマのなかの守備範囲の問題です。

なぜかと言いますと、社会的な紛争や対立矛盾について、「開発」が叫ばれるようになったこの時代に、それについての十分な反省、それを否定